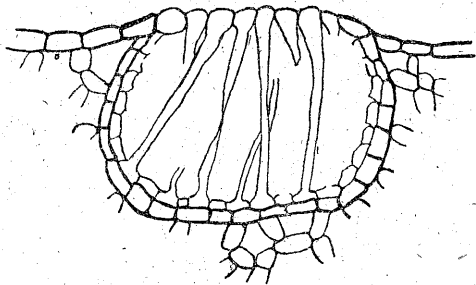


の産地に日本を擧げて居る點からもハヒハマボツスである。ヒメボツス var. *typicus* Knuth が我國に産するとした最初の記録は、恐らく三好、牧野兩博士の日本高山植物圖譜 2: 80, fig. 229 (明治 41 年, 1903) で、産地は「中部北部草本帯 (信州)」と記されて居る。併し私は邦産の標本中で確かに var. *typicus* に屬するものに接した事がない。東京科學博物館で var. *typicus* に當てられて居る陸奥百澤其他の標本も何れも誤で、皆ハヒハマボツスである。

狹義の *S. Valerandi* L. 即ち var. *typicus* では莖は直立し、花梗は通常長さ 5~12 mm で斜上し途中小苞の附着點で少しく膝曲更に上向し、小苞は披針形、花は大きく蒴も大形で長さ 3~4 mm ある。歐洲、西アジア、アフリカ、濠洲にあり、ヒマラヤ、中華民國東南部に迄分布し、オホツクに産すると云ふのは疑はしい。ハヒハマボツスはこれより瘠長で、莖上部は枝を分つて往々擴散し、疎な繖狀花序を着け、花梗は一層細く通常開出し眞直で長さ 8~18 mm、小苞は狹小で、花は約半分大、蒴も小さく長さ 2~3 mm である。北海道 (石狩以西)、本州 (近江、隱岐以東) の多くは瀕海の濕地に生じ、南北米大陸、西印度諸島に廣く分布して居る。最近 *S. Valerandi* とは別種として取扱はれるのが普通で、米國では *S. parviflorus* Rafinesque (1818) の學名が用ひられ、この方が *S. floribundus* Humboldt, Bonpland et Kunth より 1 ヶ月前に出版されたと云ふ事である。

○破古紙補遺 (久内清孝)

戰災區域で、破古紙即ちオランダビュを見付けて、其腺 (Zwischenwand drüse) の形態學的特異性から之を同定した上、(この腺の圖は猪野俊平氏の植物の組織に出て居るが名稱が與えられてないから) 小倉謙氏に依頼して間膜腺なる譯語の制定を求め、之を採集と飼育に投稿してをいた。其後遇然雜誌本草を再讀していた折、其第二十三號 (昭和 9 年 8 月發行) 48 頁に牧野先生が「むかし破古紙といへる藥種をしらずしてふる反古を用ひたる人のわらへる事なるが」ナル雨森芳洲の「たはれぐさ」を引用し、かつ、草木圖説の圖を轉載されていたのに氣付いた、依て本邦に於ける、破古紙文獻の一



オランダビュの間膜腺縱斷略圖 (原圖)

を看過したる罪を謝することにする。私は現在の植物學者でこの生本を熟知されて居るのは、先生丈ではあるまいかと信じて居た折柄、まことに貴重な文獻を發見したのでよろこぶ。其後更に次の文獻を見たので、それをもつけ加えてをく Em. Perrot & Paul Hurrie: Matière Médicale et Pharmacopée Sino-Annamites (1907) p. 150. この書に

は破古紙の安南語名として、佛蘭西式に綴つた、次の様な名稱が擧げてある Hút-bô-còt-chi, Pha-co-chi. それから、其藥効として Ses fruits aromatiques, à saveur amère, sont ordonnés dans les maux d'estomac, dans la spermatorrhée et dans certaines maladies des peau. と記してあるが、何れ支那文献から轉記したものであろう。従つて大した文献ではないが、現在では珍本だから一應其内容の一部に觸れてをく。

○リングに模様を現すの法 (久内清孝)

近頃リングの表面に繪や字を表したものが見られる。これは、結局炭素同化作用の實見でやるデンプン寫眞と同じ様な原理でやるのである。中支方面では壽の字を現したものがなどが市販されて居るし、園藝の雑誌で之を傳へたものがあつた様に記憶して居るがしかし之は近頃起つたことでなく、既に嬉遊笑覽十の上、飲食の部に、汝南圃史を引用して「好事者以枝頭向陽未熟時剪紙爲花鳥貼其上待江熟乃至派則花紋燿燦入盤釘可愛」なる文句を轉録してある。恐らく遮光性のものなら、スミでも、寫眞の陰畫でも、なんでも同じ結果をもたらすものと思はれる。東北地方の好事家の實見を望む。いや既にやつて居ることゝ信ずる。

○カハノリを詠んだ漢詩 (前川文夫)

カハノリ屬 (*Prasiola*) は本州や臺灣の山間の溪流に生ずる。中華民國にはまだ知れていないようだ。近頃父から示された詩の中に次の様なものがある。唐の王建が原上新居と題して詠んだもので、自掃一間房、唯鋪獨臥床、野羹溪菜滑、山紙水苔香、陳藥初和白、新經未入黃、近來心力少、休讀養生方といふのであるが、彼が渭水の平野で咸陽の北の丘陵に居をかまえて、そこでの生活をよんで居る。この中で野羹溪菜滑らかに山紙水苔香しといふ對句は明らかに山菜を食用にして居る有様を述べたもので、後者の句は恐らくカハノリの類を云つているのであろう。長安の邊は常綠闊葉林の北限だから、大體カシの上限をなしている東京都下、氷川町の日原谷や川苔谷にカハノリがあるのと同じやうな溪流の状態が考へられるのである。この詩は全唐詩第8函第5冊にある。(昭和23年2月)

○水蓼の新例ツルニンジン (前川文夫)

水蓼については柴田桂太先生が曾つて植物學雜誌に述べられた後には報告を見ない様である。私はキキョウ科のツルニンジン新例として追加する。昭和19年夏、東京都下日野で見たところでは、蕾では萼片5と花冠裂片5とは夫々扉狀に閉じて完全な球を作つて居るが、蓼は子房下部に着くのに反し、花冠はそれとはなれて子房上部につくために蓼の作る球の内側に可成の空間を隔て、花冠の作る球が入れ子になつて居る。この空間に一滴の水が入つて居つて、日光にすかして見ると水滴の動揺するのがよくわかる。この水は殆んど無味無臭であつて開花と共に落ちてなくなる。勿論腊葉では蕾は押されるとすぐ割れるために氣づかずに終る。同屬のバアソブでも同様な現象がみられるものと期待するが生きた花にぶつからないので、いまだに確められずに居るが、この水